

名作54

読む

子三夫浩い一子男滋彦郎作郎衛美郎裕美徹節滋彦郎作郎子
 惠謙康正け光 瑶 義 池 武睦伊一徳芳太立呂水塩池 武睦伊一聖
 合方沢田沢田 岡 池 口 橋 内順崎藤東城比水塩池 口橋内順田
 落北入篠中磯森片小野高矢紀目近伊大伊清小小野高矢紀田
 平子昭輔弘徹樹門平子士郎徹平邨憲一平枝彦平子士郎徹也
 昇葉 部 洋 田 守 崎 浦 浦 井 谷 本 賀 慎 楸 正 惣 和 久 光 明 恵 国 三 賀 義
 岡 尾 下 田 守 崎 浦 浦 井 谷 本 賀 井 藤 正 下 松 地 上 浦 井 谷 本 賀 田
 大松阿山長江尾三杉金巖奥芳浅加畑山立澤村杉金巖奥芳副

見る



日新聞 Part 3 法部編

聴く

名作 54

読む



える

Part 3

朝日新聞
学芸部編

朝日新聞社

聴く

名作 54 読む見る聴く Part ③

定価 一三〇〇円

朝日新聞学芸部編

一九八七年八月十日 第一刷 発行

発行者 八 尋 舜 右

印刷所 共同印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

●104 東京都中央区築地五十三一二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇一七三〇

目

次

山月記	9	大岡昇平
カルメン	14	松尾葉子
ヘンリー・ライクロフトの手記	19	阿部 昭
裸のサル	24	山下洋輔
路上	29	長田 弘
欲望という名の電車	34	江守 徹
大菩薩峠	39	尾崎秀樹
セールスマンの死	44	三浦朱門
紅樓夢	49	杉浦明平
ドリトル先生アフリカゆき	54	金井美恵子
サンドリヨンまたは小さなガラスの靴	59	巖谷 国士
博物誌	64	奥本大三郎
蕪村句集	71	芳賀 徹

明日に向つて撃て！

77

浅井慎平

おくのほそ道

82

加藤楸邨

ヘリオット先生奮戦記

88

畑 正憲

土

93

山下惣一

マレー蘭印紀行

98

立松和平

アンネの日記

103

澤地久枝

ドレフュス事件

108

村上光彦

孤島の鬼

113

中井英夫

夜明け前

118

井出孫六

銀の匙

123

岸田衿子

冥途

128

種村季弘

鶏の卵ほどの穀物

133

米倉斉加年

忍者武芸帳

138

副田義也

草迷宮	143	前田 愛
ジエーン・エア	148	落合恵子
ガラスの鍵	153	北方謙三
怪談	158	入沢康夫
曾根崎心中	163	篠田正浩
ソナチネ	168	中沢 けい
金閣寺	173	磯田 光一
あなたに似た人	178	森 瑤子
カサブランカ	183	片岡義男
クリスマス・キャロル	188	小池 滋
東海道中膝栗毛	193	野口武彦
歳時記	198	高橋睦郎
風姿花伝	203	矢内原伊作
奇巖城	208	紀田順一郎

	北越雪譜	213	目崎徳衛
	野菊の墓	218	近藤芳美
	源氏物語	223	伊東俊太郎
	老妓抄	228	大城立裕
	動物記	233	伊藤比呂美
	百年の孤独	238	清水 徹
	人類の星の時間	243	小塩 節
	モオツアルト	248	三浦雅士
	さまよえる湖	253	椎名 誠
	アポリネール詩集	258	塚本邦雄
	異邦人	264	池田満寿夫
	子別れ	269	小沢昭一
	ブリタニキユス	274	田辺聖子
	ワルキューレ	279	辻 邦生

A 裝
・
D 幀

菊地信義

名作
54

読む見る聴く
Part ③

昭和六十一年四月～六十二年四月『朝日新聞』連載。

大岡昇平さんと 山月記を 読む

中島敦（あし）（明治四十二年～昭和十七年）の『山月記』は、その死の年の『文学界』二月号に、ほか一編と共に「古譚」と題して、掲げられました。いずれも短いものでしたが、構成の緊密さと簡潔硬質な文体で読者を魅了しました。唐の下級官吏が発狂して虎になる、今日でいえば「変身譚」です。下敷きは唐の小説『人虎伝』で、人名その他そのまま踏襲しています。一種の再話ですが、不要な細部を省き、人食い虎に変身するに至る妄執を、文学への志に統一して、効果を強めています。

隋西（中国の甘肅省）の李徴は博學才顯、天宝（唐の玄宗の治世）の末年、若くして名を虎榜（官吏登用試験に通る）に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃む所、頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に歸臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺さうとしたのである。

この格調の高い文体は、戦時下の時局迎合の戦記物や、単調な家庭小説の氾濫はんらんのなかで、新鮮だったのでした。

『人虎伝』では身分に不満で乱行の末、発狂したことになっていますが、『山月記』では詩を愛すること深く、しかし文名が得られずに発狂する。敦の家は代々儒者で、敦は中国文学の教養が身についていました。西欧文学にも接し、東大国文学科在学中は森鷗外を研究した。いくつかの習作があったが、発表の機会がない。『山月記』は昭和十六年に書かれ、『文学界』に発表された時は、持病の喘息ぜん息が悪化して、十七年十二月には遺作『李陵』を残して死んでしまします。

李徴はある日旅先で宿屋を出て行方知れずとなる。友人の袁えん徴が虎の出るといふ林のそばを通りかかると、一匹の虎が躍り出て飛びかかろうとしたが、身をひるがえして、もとの林にかくれた。「あぶないところだった」とくり返し、人間の声でつぶやくのが聞こえる。袁が近寄り、「その声は李徴君ではないか」ときくと「そうだ」と答え、自分はなぜ虎になったか、そのいきさつを語ります。

一年ばかり前、何ものとも知れぬ声に誘われて、闇の中に走り出た。気が付くと、身は獣身となり、通りかかった兎を食べていた。なぜそうなったのかはわからぬ。しかし一日のうち何時間かは人間の心が帰ってくる。それもだんだん短くなっているのです、完全に獣と化する前に、自分がこれまでに作った詩編を今からいうから、書き留めてほしい、といい、数十編の詩を唱える。現在もなお詩作の能力があることを示すために、半ば獣となって、旧友と遇う心境を語る。

要するに、自分はおのれの才をたのみ、尊大になった。しかも師につかず、友との交わりも求めなかった。それは自分の卑少を自覚させられるのを怖れる「羞恥心しゅうちしん」からだった。

己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。

原典『人虎伝』では下僕をむち打ったり、未亡人と通じ、一家の者に拒まれると、その住居に放火したり、小説的行為の末発狂するのですが、敦はそれを自らの詩才への「自尊心」と「羞恥心」との複合体のせいにしています。しかしそれでも闇から呼ぶ声に誘われて、なぜ虎となるかには謎が残るでしょう。

敦の『狼疾記』に「俺たちは俺たちの意志でない、或る何か訳の分らぬもののために生まれて来る。俺たちはその同じ不可知なもののために死んで行く」とあります。

敦と同じく中国文学に詳しかった武田泰淳には、戦後「作家の狼疾」という感想があります（『中国文学』昭和二十三年二月）。

「狼疾とは『指一本惜しいばかりに、肩や背まで失うのに気がつかぬ、それを狼疾の人という』と孟子にある言葉である。指一本とは中島の自我であり、その自我にこだわる文学的状态である。肩や背とは生活体として中島の全存在であり（中略）中島ははげしい狼疾をわずらっている。彼は指のために肩を失なわんとしている」

敦はほかに『名人伝』『弟子』など人間の業や倫理の極限まで追究した作品があります。遺作『李陵』は蒙古へ遠征して俘虜かりよとなった漢の將軍の話で、『史記』を書いた司馬遷しばせんは彼を支持したため、宮刑という去勢の罰を受けている。発奮して『史記』を完成した。これは泰淳が、同じ昭和十七年に『司馬遷』に書いたことです。

これら戦時下の作家たちは、世界と歴史と自己内部にある、なにか巨大な怖いものを感じており、それが泰淳の戦後の文学活動の原動力となり、中島敦の戦時下に書かれた小説が、今日も読みつがれる理由です。

『山月記』にもどると、虎になった李は語り終わると、袁に向かつて、二度とここを通らないでほしい、その時、完全に獣になった自分は君を襲うかも知れない。百歩行つて丘上に到ったならば、振り返つてくれ。自分の恥ずかしい姿を見せよう、と悲泣しながらいった。

一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振り返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮ほうこうしたかと思うと、又、元の叢くさむらに躍り入って、再びその姿を見なかった。

(作家)



中島 敦（一九〇九〜四二）

幕末以来の街の儒家の家柄に生まれる。父も中学の国漢教師であった。敦の文学的素養はここに負うところ大きい。一高に入るころから、ぜんそくの発作がはじまる。昭和八年、東大を卒業して私立横浜高女教員に。

昭和十一年、自伝的な『狼疾記』をかきあげる。同十六年（三十二歳）、しばしばの発作に転地療養を考える。その発作はすでに週一、二日しか勤務できない状態になっていた。このころ書きあげた『山月記』などを深田久弥に託し、南洋庁に国語教科書編修書記として勤務、パラオ島に行く。

が、翌十七年はすでに死の年である。三月南洋庁を辞任、帰京した五月に『光と風と夢』を発表、刊行。あの『宝島』『ジキル博士とハイド氏』をかけたスチープンスン。この作家のサモア島での晩年を日記の形で描く。病弱でロマンチストでスタイリストで……敦は、ここに自身を重ね合わせている。十二月、ぜんそくで死去。三十三歳の、作家生活に入る間もない死であった。「戦時下において、その情熱と深い詩魂を強じんな意志と理知とによって格調の高い文章に結晶させた作家」は自らそれを確かめる時間をもたなかった。

『李陵』『弟子』『名人伝』が発表されたのは没後である。

*

「中島敦全集」三巻が筑摩書房からでている。『山月記』『狼疾記』『李陵』『光と風と夢』などの全作品は第一巻に。第二巻は習作、各草稿など、第三巻に日記など。

文庫でよむには『李陵・山月記』（新潮）で。表題作のほか『名人伝』『弟子』が入っている。国語教科書や副読本に中島敦の作品があつて、なつかしい人も少なくない。

松尾葉子さんと カルメンを 読んで見る

ジプシーといえば非常に魅力的な女性を想像することでしょう。自由奔放で思いのまま生きている情熱的な女性を。

ヨーロッパに留学するまで、私は音楽の中に出てくるジプシー音階やオペラ「カルメン」を見て、ジプシーに対するイメージをふくらませていました。オペラでのカルメンは華々しく歌い、現実離れた生活をして気ままに生きる幸せな女だと思っていました。気まぐれ、気ままという性格は女性にとってある種のあこがれでもあるのでしょ。

私がフランスで初めてジプシーらしきものを見たのは留学して間もないころでした。ジプシーらしきものと言ったのは、本当に彼らがジプシーなのかどうかはつきりしないからです。観光客の集まるところに必ず現れ、五、六人のジプシーの子供があつという間に盗みをはたらくのです。盗まれる方が悪いし彼らは盗むことを何とも思っていない、とフランスに住む人は言います。盗難にあった人の話をきく